

【1】

何時間歩き続けただろう。もう足の神経が麻痺して棒のようだ。だが、次の瞬間その目の前に広がる光景を目の当たりにし一切の疲れが吹っ飛ぶ。

町を見つけたのだ。小高い丘を下ったところにかなり大きな町を見つけた。思わず目が潤む。久しぶりに人に会える！これで何かしらの解決策を見出せるかもしれない。走り出そうとしたところで足がもつれ思わずこける。おいおい、足てば。もうちよつと頑張ってくれよ。ほら、目の前に村があるじゃないか。あそこまでいけばゆつくり休めるし、ご飯にだってありつけるぞ！自分でも訳が分からなかつたがなぜか笑い声がくすくすと漏れていた。疲れすぎて軽くメンションがあがっている様だ。

一步一步、歩けば歩くほどに町は近づいてくる。そのたびにその詳細が見えてきた。建物は石造りのものが多く、竹人が見慣れてきたコンクリートのビルや木造の家とは造りが大きく異なる。2階建ての建物が多かった。時計塔のようなものが一本、村の中心部分に伸びているだけで他に高い建物は見当たらない。つた。

例えるのなら少しレトロなヨーロッパの町並みといったところだろうか。どこかの映画村かヨーロッパ村にでも来たんだらうか？村に向かい歩を進めながらふと思つ。そうだ。もしかするとそうかもしれない。

確か鎌倉市の裏手のほうに映画の撮影所があったと聞いたことがある。こんなに大規模たとは知らなかったが……。そうか……。林をどう間違えて進んだのかはわからないがそこに出てしまったんだ！なんだ……。なんだそうか……。そういうことか……。じゃあさっきの半馬人は撮影中のキャスト？……。さっきのも、もしかしたら撮影中だったのかもかもしれない。ああ……。そうか、そうなのか……。ならつじつまが合うじゃないか！蝶だつて当然作り物に決まつている。あんなガラスの羽をした蝶がいるものか！なんだ……。急に肩の力が抜けたような気がした。

一瞬、どこかの異世界にでも紛れ込んでしまったのではないかという妄想を抱いたが所詮それは小説やおとぎ話の中での話しに過ぎない。この世界にそんなものがある訳がない。なんだ！

「なあくんだ！」

口に出して喜んだ。今までの自分がちよつと馬鹿馬鹿しく思えた。携帯もきつとサーバーがトラぶつたとかそんな感じなのかもしれない。

「なあくんだ！！」

もう一度口に出して喜んだ。

やがて町の入り口まで差し掛かる。すると入り口のとこに数人の女性が輪を描くように立っているのが見えた。衣装はやはりヨーロッパの民族衣装のようである。舞台衣装だろうか。その輪に近づいていくと女性の一人が僕に気がつき目を丸くして見せた。突然の部外者の登場に驚いたのだろう。それとももしかして今まさに撮影中？慌てて回りをみるがカメラらしきものは見当たらない。

「あの…」

思い切つて声を掛けてみる。すると突然和やかに話していた女性たちの態度が変わる。まるで僕を化物でも見るかのような鋭い目つきに変わったのだ。互いに腕をつかみ合い今にも逃げ出しそうな体制をとる。一人の女性が「わこわという。」

「あなた、一体何者だい?！」

その態度にちよつと驚いたがなるべく安心させるようにゆつくりと落ち着いた口調で答えた。

「あの…すみません…道に迷つてしまつて。ここから一番近い駅を教えてくださいませんか?」

「あなた、ケンタウロスじゃないんだろ?うねえ?！」

僕の質問には答えてくれずまた新しい質問をぶつける。

「は?」

思わず聞き返す。

「どうなんだつて聞いてるんだよ!」

噛み付くように怒鳴る。

「え…?あ…ケンタ…?違いますけど…」

正直彼女が何を言っているか理解できなかった。そういう台詞のある役で、それに入り込んでいると、
ろなんだろ?うか。

「なんか違うみたいじゃないかい?こんなひよつとした弱つちいケンタウロスなんて見たこともないよ。」

もう一人の女性が言う。弱っちい…。一体何と比べて言っているのかは知らないが正直良い気分はしなかったが気を取り直す。

「あの……ここから一番近い最寄り駅を教えてくださいただけじゃないでしょうか？」

「え？なんだつて？駅？船かい？」

船？！おかしいな……そんなところまで歩いてきていたのか？確かに鎌倉市には海がある。が、海と言っても港ではなく海岸だから船着場なんてないし映画の撮影所は海とは間逆の方向にあつたような気がしたのだが。それに鎌倉市の海の近くにこんな広大な草原なんてあつただろうか。だんだんと頭が混乱してくる。

「おや、旅人さんかい？」

脇の家から人が出てきた。小柄でやはり民族衣装のようなものを着た老婆だつた。手には大きなざるかごを持つている。それを聞いて女性たちもとたん安心した様子を見せた。

「珍しい格好をしているね。どこから来たんだい？」

「え？」

これはジョークだろうか、それともまともに答えるべきなのだろうか。返事に困る。

「市場にでも寄つていくかい？にぎやかだし新鮮な野菜もあるよ。私も今から買いに行くところさ」

そういいながらかごを持ち直してみせた。

もう……はこの話につきあうしかないのだろうか。それにその市場とやらにいけば、撮影衣装しやない

普通の格好をしたスタッフとかもいるはずだ。その人に聞けばいい。僕は返事をする。と老婆の斜め後ろを
ついで歩きだした。

無言のまま3分くらい歩いた。だろうか徐々に賑わいを見せ始めやがて市場の中へとたどり着いた。

わあ……思わず声を漏らしてその景色を眺めた。白い布を屋根代わりにしたくさんのテントを張った店が
道の両端にずらりと並ぶ。良く見るとみたことのない野菜や食べ物、小物などではない。それにな
りの賑わいだ。みんな、先ほどの女性たちや老婆のような民族衣装のようなものをまとっている。

しかし……どれだけ探してもスタッフらしき人は見当たらない。撮影中のところに入り込んでしまったの
だろうか？上から撮ったりするかな？と見上げるがカメラらしきものは見当たらなかった。

「おい、その旅のお方。安くしとくよ、どうだい？」

テントで果物を売っていた男が足を止めて立っている僕に声を掛けた。そういえばもう何時間も何も食
べていない。そのテントの前に行く。と商品を眺めてみる。やはりどれも見慣れないものばかりである。ピン
ク色したりんごのような物や青いぶどうの粒のようなものがリング状につながった物など……。これ全部
作り物なんだろうか？それに売ってくれるというのだからお土産に一ついいかもしれない。ために赤い
きゅうりみたいなものを手に取る。

「これいくら？」

「100キリだよ」

「えっ？ああ……100円ね」

値段も手ごろだ。かばんから財布を取り出し100円玉を取り出すと商人に差し出した。

「なんだい、これ？」

不思議そうに100円玉を手に取りるといろいろな角度から覗き込むように見る。なんだいつて聞かれてもただの100円玉である。

「100円ですけど」

そのままに答える。

「旅のお方、どちらからいらしたのかは知らんがここではキラリつて言う、こういう硬貨じゃないと買物ほできないですぜ？」

そういつて取り出したのはガラスで出来た美しい硬貨だった。大きさは100円玉より気持小さいだろう。ブルーの透き通った美しい、おほしきのように見えた。

「え…あの…僕お金これしか持つてないんですけど」

「じゃあだめだよ。悪いけど他をあたってくれ」

そういいながら僕が手にしていた赤いきゅうりを奪い取ると大事そうに布で磨き商品の山のなかへ戻した。

……そんな…。僕が呆然と立ち尽くしているとそこに立つてると仕事の邪魔だよ！と手で追い払われた。仕方がなく僕は人の流れに沿って歩いてみた。

様子を見ていると本当に買い物をしているようにしか見えない。これが映画の撮影なんだろうか？お

腹すいた……。市場の中では肉や魚のようなものも売っていておいしそうなにおいが漂ってくる。それに、なんだかもう疲れたよ……。

少し広い広場に出た。時計塔がある広場だ。広場の中央にシンボルのように大きな木が一本立っていた。その根元にどっかりと腰を下ろし木に寄りかかった。はあ……。疲れた。やつとのことで日がかげり始め空が茜色に染まりかけていた。今何時なんだろう。そうだ、時計！塔の上を見上げた。

……え？眉間にしわを寄せる。時計は確かにあった。数字は振っていないがその代わりに模様のようなものが飾つてある。念のため数えてみるがちゃんと十二個ある。しかし……。針がないのだ。短針も長針も、当然秒針もない。なんだ！壊れてるのか！！もう……。今日は本当にがっかりすることばかりだ！がっかりした気持ちと同じようにもう一度乱暴に木の根っこに座り込んだ。

少し寒い。かばんから土まみれのスーツを出すとそれを着込んだ。と……。これは……。教科書や筆記用具にまぎれて水筒が埋もれているのを見つけた。そうだ！羽島翼かくれた水筒！……。乱暴に取り出すと水筒のふたを開けた。

かすかにりんごのような香りがふわりと漂う。一口飲んでみる。どうやらカモミールティーのようだ。まだかすかに温かい。

久しぶりの液体は喉をしみるように潤して通り過ぎ、胃袋を暖めた。おいしい……。思わず泣きそうになった。ハーブティーがこんなにおいしいものだったなんて……。もう一口くちをつけようとしたと……。で「おいちゃん！」

と声を掛けられた。

顔を上げると手に持ったかごいっぱいには先ほどテントでみたのと同じピンク色をしたりんごのようなものを詰めて黄緑色の頭巾をかぶった女の子が立っていた。瞳の色が恐ろしいほどに黒かった。

「おいしそうね。なに飲んでるの？」

顔はかわいいが表情が冷たい。そこに笑顔はなく何故だろう、一瞬弟の明人と重なって見えた。

「カモミールティーだよ。」

「カモ……なにそれ、聞いたことない」

女の子は小首をかしげて不思議そうな顔をする。やっぱりどことなく弟と重なる何かがあった。思わず僕は水筒を女の子に差し出して見せた。

「飲む？」

すると一瞬躊躇うそぶりを見せたがりんごいっぱいのかごを足元に置くと女の子は両手で水筒を受取り口をつけた。

「……………なにこれ……」

突然女の子が声を上げた。しかし何故だろう……この子の言葉は少し音量が低く少し聞こえ辛い。肺活量が弱いのだろうか。

「す……い……す……くおいしいけれど……この香りはなに？薬湯かなにか？」

「え？薬湯？まあ……でも一応アーブティーだから何かしら効能あるのかな？リラックス効果とかかな？」

「リラックス？すごいね。お兄ちゃん医術者なの？」

「へ？」

「すごいよ…いつも病気のときに飲む薬湯なんかより全然おいしいよ！…まるで果物の汁を飲んでるみたいだわー！」

「ふふ…そこまで喜んでくれるとは思わなかったよ」

お茶一杯でそこまで感動する子供がいるだろうか？その子がどうしても明人と重なって見えて愛おしく思えた。

「ねえ、ここってなんていう名前の町かな？」

女の子に聞いてみることにした。女の子は答える。

「ここはディフテッソスよ」

「はい？」

思わず聞き返さずにはいられなかった。

「ディフテッソス。おにちゃん見慣れない服だけどどこから来たの？」

小首をかしげて見せる。どこから答えればいいのかろう…

「鎌倉市って知ってる？」

「カマクラッシ？ってど？」

「鎌倉しらない？鶴岡八幡宮とか由比ガ浜とか大仏とか有兵衛でしょ？」

「ええ？知らないなあ。それ何？神様の名前？」

「大仏は…神様？いやあれは仏様？」

思わず口の中でぶつぶつとつぶやいてしまう。この子じゃ幼すぎてわからないのだろうか。

「ねえ、お父さんかお母さんは近くにいないの？」

大人に聞いたほうが話が早そう。すると突然女の子の表情が曇る。何かまずいことを聞いてしまったのだろうか。

「いないの…。二人とも死んじゃったから」

しまった！一番聞いてはいけない質問をしてしまったようだ。黙り込んでみるうちに女の子の表情は沈んでいく。

「…（こめん）あ…えと、お茶良かったらもつと飲んで良いよ！」

「本当？！」

女の子は喜んでもう一度水筒に口を付けた。両親がいないわりに身なりはきちんとしている。僕のスーツの汚れの方がひどいもんだ。女の子がお茶を飲んでいる間市場のほうを眺めていた。相変わらず賑わっていて空気が暮れてきたので商品を照らそうとランタンで明かりを付け出した。テントもちらほらとある。

そこで面白いものを一つ見つけて目が留まった。

。玉口のような奇抜な格好をした道化師が芸をやっているのだ。片手に不思議なぼんやりと光る玉があり、もう片方の手に持ち替えたかと思うとそれを宙に浮かせて見せたのだ。と思った次の瞬間、玉が二つに増え周りの観客らから歓声と拍手があがった。すごいなあ……。光る玉はみるみると増え、どれも宙をふわふわと浮きながら漂っている。一体どんな仕掛けになっているのだろう。玉と玉同士が光の線で結ばれて何かの形を現した。なんの形かはわからなかったが、形がそこで止まると観客たちはさらに声をあげてその芸を喜んだ。

道化師がお辞儀をし、どうやら芸はこれで終わりのようだ。客らが道化師の足元においてある箱の中にコインを投げ入れていた。

「お兄ちゃん、ご馳走さま」

そう言つて水筒のお茶を飲み干した女の子がそれを差し出した。

「あ……どういたしまして」

と言つた次の瞬間、心の中で叫んだ。あ……全部飲まれちゃった……今になつて焦る。食べ物も買えず唯一の飲み物だったのに……。だが焦つても後の祭りである。ん？までよ？……もしかしたら僕でも出来るんじゃないだろうか？

道化師は片づけを済ませると市場の中へと姿をけしていた。ここはだめもとでやってみるしか……僕が何も言わずにいると女の子が不思議そうに顔を覗き込んだ。

「どうしたの？」

「うん。いい案が浮かんだんだ！」

「案？」

「そう……！」

そう言うつと僕は早速座り込むと木の脇に立てかけておいたバイオリンケースを引張り出し中からバイオリンを出した。

「うわあ……綺麗！」

女の子の歓声があがる。

「それは何？」

「これはバイオリンっていう楽器だよ」

肩当てをバイオリンにはめ、弦を軽く指ははじいて調弦をする。大丈夫、音は狂ってないみたいだ。すつくと立ち上がりバイオリンを構えた。

すると、その異変に気がつく。いつの間にか左手の小指に指輪がはめられていたのだ。何だ？これ？もちろん自分ではめた覚えはない。いつの間にこんなものが……。指輪に小さな紫色の石がくっついている。アメジストのようだ。演奏に邪魔かもと一度バイオリンを地面にそつと置くと指輪を抜こうとしたのだが……。あれ……抜けない。しっかりと指に食い込んでしまっていてびくともしないのだ。なんなんだ、これ……。仕方がない、これは後回しだ。気を取り直してもう一度バイオリンを構える。

「何するの？」

「いまからね、綺麗な音楽を聴かせてあげるよ」
女の子に慣れないウインクをしてみた。

【2】

広場にバイオリンの音色が響き渡った。人々は聞きなれない音色に足をとめてその音楽のほうへ顔を向ける。優しく甘い音色はその場の空気の色さえも変えていった。女の子も目を丸くして竹人が演奏するその姿を見守った。エルガー作曲「愛の挨拶」。CMとかでも良く流れていて誰でも一度は聴いたことがあるであろう有名な曲だ。やがて約二分間という短い演奏が終わり僕がバイオリンから弓を下ろした瞬間にたくさんの拍手が沸き起こった。

「すごいよ！ーお兄ちゃんすごい！ーねえ、もう一曲弾いて！ー」

女の子が驚いた表情を作りながら裾を引っ張ってせがんだ。

「いいよ」

僕は快く依頼を受けると再びバイオリンを構えた。今度はもう少し元気の良い曲。クライスラー作曲「デンポデ・メヌエット」本当はピアノの伴奏もつくのだが今回は当然無伴奏。だが無伴奏でも十分明るさを保てる曲だ。ピアノ間奏のところは適当に切ってバイオリンだけでつなげて演奏する。やがて音楽の旋律に乗って人々が踊りだし始めた。横目でその様子にちよと驚きながらも自分の演奏でこんなにも喜んで

くれているなんて嬉しいじゃないか！と感激する。

「だんだんと演奏も乗りに乗ってくる。さらにもう少しテンポが速く軽快な曲、同じくクライスラー作曲「道化師のセレナード」最後に僕の大好きな曲の一つ、パガニーニの「ラ・カンパネラ」を弾き切ったときには大きな歓声と拍手に包まれていた。少し息を切らせながらなんとか完奏できた自分にほっとしつつ一度深くお礼をする。すると期待したとおりバイオリンケースにたくさんコインが投げられた。さつきでントで見せられた青いガラス色のコインもたくさんある。ほかに赤や桜色、黄色に緑と色とりどりのコインが投げられた。

「やった！……これで何か食べ物を買える！……嬉しさのあまりにやけ顔をしながらありがとうございます」といいながら何度もお辞儀を繰り返した。

やがて観客が散っていくと僕は座り込みバイオリンケースに集まったコインをキラキラした目で眺める。ケースの中から青いコインを一枚拾い女の子に差し出して言った。

「これでそのりんごを売ってくれるかい？」

女の子はにこりと微笑んだ。このとき初めてこの子の笑顔を見たような気がした。

「そんなにたくさんいらわないわ。1キラリでいいのよ。」

そういうと自分でバイオリンケースの中にあつた黄色いガラスの硬貨を二つ拾い上げた。

「それにこれはオルテキっていうのよ。」

そっぴいながらピンク色のりんごを二つ手にとつて差し出して見せた。

「ありがとう」

オルティキを女の子から両手で受取った。ふと女の子の瞳を見ると最初は真っ黒だったのが紫色に変わっているのに気がついた。まるで宝石のようにきらきらしたそれは美しいアメジストのような紫色であった。思わず見とれ、手が止まると、

「カンナ！」

女の子の後ろのほうから女性の声が響いた。

「あ！おばあちゃん……！」

「どこへ行ったかと探しまわったよ。さ、帰るよ！」

カンナと呼ばれた女の子は嬉しそうに笑うと老婆に駆け寄るとスカートにしがみついた。

「あのね、おばあちゃん……この人が薬湯を飲ませてくれたらすごく元気になれたの……もう痛くないよ！」
？

「本当かい？ああ……、お前……その目は……」

女の子の前髪を退けて女の子の瞳を真っ直ぐに見つめた。そして僕のほうを振り向くと深々とお辞儀をして礼を述べた。

「あ……いえ……たいした事をしたわけじゃ……」

痛いって……この女の子は……か具合が悪かったのだろうか？一見そんな風には見えなかったが。

「それにね、すごく綺麗な音を出すものを持っていて、さつきも演奏してくれたと……なの。皆で踊ったり

したんだよ！」

「そうかい、それはそれは」

そういいながら女の子の頭を優しくなでると僕に向かつて一瞥してみせた。

「じゃあねー！」

手を振りながら無邪気に帰っていく女の子と老婆。僕はにこにここと微笑みながら手を振ると二人を見送っていた。

二人が市場の中へ消えていったころ空を見上げるといつの間にか日は暮れ、美しいラベンダー色に染め上がっていた。それに少し寒い。5月にしては寒すぎる。まるで9月中旬ごろのような冷たい風の匂いがした。今に鈴虫の鳴き声でも聞こえてきそうだ。もう一度その場に座り込むと僕は女の子からもらった“オルティキ”を右手に持ち直した。やつとの食事だった。ガブリと一口ほおばってみる。

!!

見た目よりも柔らかかった。酸味もある。まるでトマト、いやトマトそのものの味のようにだった。すっぱいのは苦手な筈なのに、不思議と何口でもいけてしまう。それはやはり空腹と喉が渴いていたせいだろうか。気がつくとも“ヘタ”を残し完食していた。そして、ぼろぼろと頬を伝う涙。

なぜ僕は涙を流しているのだろうか。それに少し胸が痛む。こんなにもトマトがおいしいものだったなんて。食べ物でこんなに感動したことが僕にはあつただろうか？生まれて初めて味わう感動とその味に僕は感謝しても仕切れないほどのありがたさを心の中で感じていた。残ったヘタをそこらへんに放り投げて捨て

ようやくと一瞬悩んだのだがなんとなく罪悪感を感じかばんのポケットの中に入れた。涙を制服のすそでぬぐった、とそのとき背中の方で人の気配がしたかと思うとがばつ！という音かした。

驚いて振り向くと少年がバイオリンケースを抱えて立ち去るところだった。

「あー」

少年はバイオリンケースを抱えたまま駆け出した。

「待って！」

慌てて立ち上るとかばんを肩に引つ掛け少年を追いかけた。